

青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連 Relationship between Sense of Security to New and Old Same-Sex Friends and School Adjustment in Late Adolescence

岡村 季光
Toshimitsu Okamura

キーワード： 安心感 新旧の同性友人 学校適応感 青年期後期

問題と目的

青年期はそれまでの児童期と比べ、家庭と徐々に距離を置き、親から心理的に独立し、社会や文化の影響をより能動的に受ける時期である（宮下，1995）。児童期までは対人関係において親との関係が重要であったが、青年期になるにつれて徐々に友人との関係を重要視するようになる。特に青年は、悩みを打ち明けられる人において同性友人の選択率が高い（東京都生活文化局，1985）など、同性友人を重要な他者（significant others）として認知しており、同性の友人との深い友情が育てられるかが青年の心の成長を左右する大きな要因の1つである（宮下，1995）とされている。

友人関係は環境の変化に伴い大きく変化する。例えば、進学によって新しい環境になると友人関係も新たに構築される。近年の青年期における友人関係研究では、高校卒業から大学進学する際にはその関係が大きく変化する可能性が指摘されている（和田，2001）。しかし、環境の変化によりこれまでの友人関係が解消されることはなく、むしろ関係が継続されることが多い。また、新たに形成される友人関係には、それ以前に築いてきた友人関係のあり方が反映することも指摘されている。Bohnert, Aikins, & Edidin（2007）は、高校から大学進学時の移行時における友人関係の縦断的調査において、移行10 カ月後において協力者の半数が、新しい環境で出会った友人を最も親しい友人として選択した。一方で残りの半数は高校時代の友人が引き続き最も親しい友人であることを明らかにしている。したがって大学入学時の友人形成の検討の際に古くからの友人（以下旧友人）と大学入学時以降における新しい友人（以下新友人）とのかかわりのありようを検討する必要性も指摘されている（中村・浦，2000；和田，2001）。

環境の変化に伴う友人関係の構築は、新しい環境への適応（南・山口，1992）とも言える。松井（1990）は、青年期の友人関係機能として、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する「安定化機能」、友人関係を営む中でスキルを学ぶ「社会的スキルの学習機能」、友人が自己の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」の3つを挙げている。特に「安定化機能」は、高校から大学への進学という、環境の変化により、これまでの安定した生活から新しい生活への不安が高まりやすい時には重要な機能として働くことが考えられる。新旧友人関係と適応感の関連において、Paul & Brier（2001）は、大学入学後もなお旧友人を強く思う感情が、大学入学後の孤独感を高めることを指摘している。また、渡辺（2014）は、大学に入学し新たに形成される友人関係において旧友人よ

りも親しいと感じられる存在となることが、大学生活の満足感や充実感につながることを明らかにしている。上述の研究から、入学前に知り合った友人関係がどのように推移し、現在の適応感にどのように影響していくのか検討する視点が求められる。

これまでの先行研究では友人を想起させる際に、特に明示されていない場合（岡田，2007）や親密な友人を1名想起させる（渡辺，2014）という手続きが多い。また、小塩（2013）は、「自分が結婚する時に式に呼びたい同性の友人」という具体例に示し、「あなたが現在仲のよい、または現在まで続いている同性の友人」を想起させる、という手続きで友人を想起させている。しかし、友人関係機能（松井，1990）に基づく判断基準で友人を想起させるという先行研究は、筆者が知る限りない。

そこで、本研究では友人関係機能の「安定化機能」に着目し、一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ、新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することを目的とする。学校適応感に関するこれまでの先行研究では、2つの異なる観点から検討されている。ひとつは、学校という環境がもつ課題や要請をいかに対処するかといった環境と個体との関係に焦点をあてたもの、もうひとつは、それらの課題や要請に対する主観的な認知や評価、感情に焦点をあてたものである（石田，2012）。本研究では後者の学校適応感に焦点を当てた大久保・青柳（2003）の大学生用適応感尺度を用いる。この尺度は「個人が環境と適合していると意識している」という視点が重視されており、当該の環境（学校）が自分に合った場所、つまり居場所があると感じる（小沢，2000）状態を測定する。これまでの先行研究から、本研究の仮説として、居場所の中核的位置づけである安心感（岡村，2014，2015）を新旧いずれの友人関係に求めているかで学校適応感に差異が生じることが考えられる。すなわち、新友人を選択した者は、旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して、現在の学校適応感は高くなることが推測される。

方法

調査対象

調査対象者は大学生及び専門学校生289名（男子76名、女子213名）。平均年齢は20歳0か月（範囲18歳9か月～32歳9か月）であった。

調査内容

年齢・性別の明記を求めるフェイスシートの他、下記項目を印刷したB4判調査用紙を用意した。

a) 同性友人の選択 「あなたにとって、安心できる人は誰ですか」という質問の後、“現学校入学以前の同性の友人”（旧友人）、“現学校入学以降の同性の友人”（新友人）の選択肢が用意されていた。^{脚注1}

b) 大学生用適応感尺度（大久保・青柳，2003）「居心地の良さの感覚」10項目、「被信頼・受容感」6項目、「課題・目的の存在」7項目、「拒絶感の無さ」6項目の計29項目であった。

調査手続

筆者の授業中に上述の調査用紙を配布し、集団的に実施。以下に示す調査について回答を求めた。

^{脚注1} 本調査は他にも“自分”“母親”“父親”“大学入学以前の異性友人”“大学入学以降の異性友人”“大学入学以前の恋人”“大学入学以後の恋人”“きょうだい”“祖父”“祖母”“その他”“いない”の選択肢が用意されていたが、本研究の目的と異なるため割愛した。本文中の選択肢のいずれも選択していない者は、上述の選択肢のいずれかを選んでいた。

1) 同性友人の選択 「あなたにとって、安心できる人は誰ですか」という質問の後、“現学校入学以前の同性の友人”（旧友人），“現学校入学以降の同性の友人”（新友人）を選択させた。

2) 大学生用適応感尺度 普段学校生活を過ごしている中で、各項目がどれだけあてはまるか尋ねた。評定段階は「いつも感じる」から「全く感じない」の5段階であった。

なお、調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表することはないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを説明した。

結果と考察

同性友人の選択

各項目の選択有無を分類した結果を表1に示す。選択有無による群分けの際、新友人のみを選択した群は少数であったため、新旧友人を選択した群と併合を行った。その結果、新友人を選択した者（以下、現在群）が128（男子27、女子101）、旧友人のみ選択した者（以下、過去群）は100（男子31、女子69）、いずれも選択していない者（以下、無選択群）は61（男子18、女子43）に群分けを行った。男女別に独立性の検定（ χ^2 検定）を行った結果、有意でなかった（ $\chi^2_{(2)} = 3.25$ ）。

表1 安心できる同性友人選択有無の分類

新旧友人選択有無		いずれも 未選択	新友人のみ 選択	旧友人のみ 選択	いずれも 選択	合計
性別	男子	18	3	31	24	76
	女子	43	13	69	88	213
全体		61	16	100	112	289

同性友人の選択と大学生用適応感尺度の関係

大学生用適応感尺度各項目の回答に「いつも感じる」から「全く感じない」の方向へ5～1点（逆転項目は1～5点）を与え、得点を算出した。各下位尺度の合計得点を表2に示す。2（性）×3（群：過去、現在及び無選択）の2要因分散分析を行った結果、「居心地の良さの感覚」において性の主効果が有意であり（ $F_{(1,283)} = 4.29, p < .05$ ）、女性の方が高かった。群の主効果が有意になったのは「居心地の良さの感覚」（ $F_{(2,283)} = 16.53, p < .001$ ）、「被信頼・受容感」（ $F_{(2,283)} = 8.41, p < .001$ ）及び「拒絶感の無さ」（ $F_{(2,283)} = 3.84, p < .05$ ）であった。多重比較を行った結果、「居心地の良さの感覚」及び「被信頼・受容感」において現在群が他の2群よりも高く、「拒絶感の無さ」では現在群が無選択群よりも高かった。よって、新友人を選択した者が、旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して、現在の学校適応感は高くなるという本研究の仮説は支持された。

大久保（2005）は、青年期の友人関係が現在の学校生活の適応感に影響を与えていることを指摘している。また、新旧友人関係と適応感の関連におけるPaul & Brier（2001）及び渡辺（2014）の結果と一致することから、本研究の結果は妥当であると考えられる。

「課題・目的的存在」において交互作用が有意であったので（ $F_{(2,283)} = 3.31, p < .05$ ）、単純主効果検定を行った。

その結果、女性において現在群が他の2群よりも高かった。女性においては現在の学校に「安心できる」同性友人がいることにより、自分の将来の目的や課題を感じられると言えよう。

表2 同性友人選択群別大学生用適応感尺度の平均値（標準偏差）

青年用居場所感尺度	居心地の良さの感覚		被信頼・受容感		課題・目的の存在		劣等感の無さ	
同性友人選択	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
現在群 (男子 $n=27$, 女子 $n=101$)	3.43 (.59)	3.68 (.63)	3.06 (.80)	2.91 (.66)	3.49 (.66)	3.64 (.62)	3.25 (.69)	3.20 (.69)
過去群 (男子 $n=31$, 女子 $n=69$)	3.00 (.75)	3.15 (.64)	2.60 (.79)	2.79 (.57)	3.53 (.72)	3.30 (.74)	3.15 (.75)	3.05 (.65)
無選択群 (男子 $n=18$, 女子 $n=43$)	2.90 (.71)	3.06 (.67)	2.44 (.81)	2.60 (.63)	3.60 (.60)	3.18 (.72)	2.89 (.75)	2.88 (.62)

結論と今後の検討課題

本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し、一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ、新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い、学校適応感との関連を検討した結果、新友人を選択した者が、旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して、現在の学校適応感が高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので、今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。

今後の課題として3点が考えられる。まず第1に、環境の違いによって適応感に差異が出る可能性が考えられる。大久保・青柳（2003）は個人と環境のマッチングを重要視し、当該の環境において他者との関係をどのようにとらえているかが適応感を構成する要因であると指摘している。すなわち、現在の環境においてマッチングが合わず不適応を示している者でも、別の環境ではうまくマッチングして適応する場合があることが考えられる。本研究の新旧同性友人選択有無による群においては、過去群及び無選択群は学校という環境においては現在群より学校適応感とは低かったが、過去に通っていた学校の環境においては適応感が高かった可能性もある。今後は回顧的に学校適応感を測定するなど検討が必要であろう。

第2に、縦断的研究の必要性である。本研究は1時点のみの調査であるが、学校生活が進むにつれて学校適応感に変化する可能性も考えられる。渡辺（2014）は、大学4年間にわたる6回の追跡的調査で、一度も友人選択を変更しなかった調査協力者は約13%程度であり、約87%の調査協力者が少なくとも1回以上親しい友人の選択を変更していた。さらに調査期間中2回以上友人選択を変更した協力者が約56%であったことを明らかにした。特に4年制大学に通う学生は2年次～3年次にゼミに所属する、卒業に向けて進路選択が迫るなど、さらに環境が変わることが予想される。上述の事象に合わせて調査を継続的に行っていく必要があろう。

第3に、友人関係以外の影響の可能性である。特に青年期後期においては、恋人が同性友人と同等に重要な他者（significant others）として認知される傾向が高く、恋人の存在が与える影響は少なくないと考えられる。豊田・岡村（2001）及び岡村・豊田（2004）は、「安心できる人」に恋人を選択する者が一定数存在することを見いだしている。今後は、従前に構築していた友人関係を含む対人関係と、新しい環境によって生じる関係を包括的にとらえた上で、適応感との関連を検討することが望まれる。

引用文献

- Bohnert, A.M., Aikins, J.W., & Edidin, J. (2007). The role of organized activities in facilitating social adaptation across the transition to college. *Journal of Adolescent Research*, **22**, 189-208.
- 石田 靖彦 (2012). 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討: 生徒評定と教師評定を用いた他特性-他方法相関行列からの検討. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **12**, 287-292.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能. 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp.283-296.
- 南 博文・山口 修司 (1992). 大学生活への移行. 山本多喜司・S. ワップナー (編著) 人生移行の発達心理学 北大路書房 pp.179-204.
- 宮下 一博 (1995). 第6章 青年期の同世代関係. 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し-青年期 金子書房 pp.155-184.
- 中村 佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について-対人関係の継続性の視点から- 社会心理学研究, **15**, 151-163.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, **15**(2), 135-148.
- 岡村 季光 (2014). 「居場所」(安心できる人)とひとりで過ごす感情・評価の関係. 奈良学園大学研究紀要, **1**, 191-197.
- 岡村 季光 (2015). 一人ひとりの「居場所」をどうつくるか. 梶田叡一 (責任編集)・人間教育研究協議会 (編) 実践的思考力・課題解決力を鍛える:PISA型学力をどう育てるか (教育フォーラム55) 金子書房 pp.111-121.
- 岡村 季光・豊田 弘司 (2004). 青年期後期の「安心できる人」を類型化する試み. 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, **79**.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み: 個人-環境の適合性の視点から. パーソナリティ研究, **12**, 38-39.
- 小塩 真司 (2013). 大学生における想起された友人の特徴と友人関係機能との関連. 早稲田大学大学院文学研究科紀要. 第1分冊, **58**, 5-19.
- 小沢 一仁 (2000). 自己理解・アイデンティティ・居場所. 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編, **23**(2), 94-106.
- Paul, E.L., & Brier, S. (2001). Friendsickness in the transition to college: Precollege Predictors and College Adjustment Correlates. *Journal of Counseling and Development*, **79**, 77-89.
- 東京都生活文化局 (1985). 大都市青年の人間関係に関する調査-対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析- 東京都青少年問題調査報告書
- 豊田 弘司・岡村 季光 (2001). 大学生における『居場所』. 奈良教育大学教育研究所紀要, **37**, 37-42.
- 和田 実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響. 心理学研究, **72**, 186-194.
- 渡辺 舞 (2014). 大学の友人関係は変化するか?-大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について- 北星学園大学大学院論集, **5**, 67-81.